『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第1号発行

ろくおん通信

No. 125

発行日　2002年7月15日
発　行　盲人情報文化センター
録音製作係

音訳サービスの発展を願って　（最終回）

日本ライトハウス盲人情報文化センター東事業所　福井哲也

2　行き過ぎた原文忠実主義

よく、音訳は「音訳者の感情を入れず、原文に忠実にたんたんと読むべきである」と言われる。この考え方の源流は、1970年代の点字図書館界で「朗読」を「音訳」と呼びかえた発想の転換にあるようだ。例えば、日本ライトハウス盲人情報文化センターが利用者向けに発行する情報誌「読書」の1974年10月号には、「アピール『音訳』と呼んでください」と題して次のような一文が載っている。

「テープ図書を製作する際の吹き込み作業を「朗読」といい、これらの読み手を朗読ボランティアと呼んできました。当センターでは、今後この「朗読」という言葉を「音訳」と呼び換えることにしました。「音訳」と呼び換えての、今後のテープ図書作りの基本的な考え方は次のとおりです。ご参考までに。

1．『目のかわり』としての代替手段であることを忘れない。
2．誤読をなくし、正確な読みを大切にする。
3．迅速な供給に努める。
4．長時間の聴読に耐えられるよう、淡泊な読み方に留意する。」

この考え方は、録音図書製作の大切な基本といえるだろう。だが、「淡泊な読み」というのが、大切な言葉を際立たせたり、意味のかたまりを意識して読むことまでも否定しているかのように誤解されてはいないだろうか。また、「原文に忠実に」というのが、墨字に表されていることを全て音声に変え、書かれていないことは一切付け加えてはならないと誤解されてはいないだろうか。

目で見る墨字と耳で聞く音声とは、異なる特性をもっている。わかりやすい音訳、意味の伝わりやすい音訳にするには、この媒体の特性の違いを考慮したアレンジがどうしても必要になってくる。例えば、墨字の書体の違い、記号の使い方や文字づかいなどをいちいち「音訳者注」で説明していたのでは、いくら原文に忠実であったとし

ても、快適に聞くことはできないであろう。字面を忠実に再現することではなく、内容をいかに的確に伝えるかが、最も大切なのだ。そのためには、臨機応変の対応が求められる。

『音訳マニュアル　視覚障害者用録音図書製作のために（音訳・調査編）』（全国視覚障害者情報提供施設協会，2001）という本の最初の方に、音訳の精神を示す話として、次のようなエピソードが紹介されている（p.12）。

「ある女子中学生が大学生のためにフランス語の教科書を音訳しました。彼女はフランス語ができたのでしょうか？　いいえ、全然読めませんでした。一文字、一文字スペルを読みました。英語の発音で。それを聞いて盲大学生が、点字に打ち直しました。こうしてフランス語の点字教科書が立派に仕上がりました。＜後略＞」

これは「ごく特殊な事例」とことわってはあるが、これから音訳を勉強しようという人がこの話を読んだら、「音訳とは墨字に書かれていることをひたすらそのまま声に出すこと」などと思い違いをしてしまわないか心配になる。今と違い当時は、フランス語の点訳ができる点訳者を見つけることは困難だったのだろう。だから、その中学生の行った活動は、まさに貴重だったに違いない。しかし、この話が本当に音訳の精神を示しているのかとなると、いささか疑問を感じてしまう。必要なときに必要なものを読める状態にするのは、とても大切なことではある。音訳は、常にそのことを念頭においてやってほしい。だが、我々が真に望んでいるのは、単に読めればよいというのではなく、「快適に読める」状態ではないのか。快適な読書のために、上手に音訳された録音図書を、私は求めていきたいのである。

3　アクセントは気にしなくてよいのか？

音訳の質を論ずるとき、“アクセント”の問題は避けて通れないと私は考えている。ところが、『初めての音訳』（全国視覚障害者情報提供施設協会，1999）という本には、アクセントについて次のように記述されている（p.17）

「「音訳」を考えるとき「アクセント」を気にする人がいますが、アクセントが違ったために間違った情報が伝わってしまったということは、それほど多くはありません。共通語アクセントで読めるにこしたことはありませんが、音訳の目的は情報を伝えることです。共通語アクセントで読めないからという理由だけで、『目の代わり』の音訳ボランティアを躊躇しないでください。たくさんの音訳資料を製作するためには、一人でも多くの音訳者が必要なのです。私たちが、アクセントの違う地方の人たちと話をしていても、話は通じます。あまりアクセントにこだわらず、どんどん読んでいってください。読むことに慣れてから、少しずつ共通語アクセントに直していっ

ても遅くはありません。」

共通語アクセントをマスターするのは確かに大変ではあるが、かといって、アクセントをここまで軽視してよいものだろうか。アクセントは、言葉を耳で聞き分ける際の重要な要素のひとつである。共通語と異なるアクセントが頻繁に出てくると、最終的に通じたとしても、意味の理解にある種のひっかかりを感じてしまうだろう。多くの書物は、共通語の言葉で書かれている。だから音訳は、共通語アクセントを基本においてほしいと思う。そのためには、音訳初心者の時期からアクセントに意識を向け、人のアクセントをよく聞き、自分のアクセントをコントロールする練習が必要である。読むことに慣れてから少しずつ直していこうというのでは、うまくいかないように思う。

アクセントというと地域差すなわち方言のことを想起する人が多いが、アクセントをめぐる問題はそれだけではない。若者言葉を中心に見られるアクセントの変化（乱れ）は、どの地域でも起こっている。ここで私は、若者の言葉はよくないなどと批判するつもりはまったくない。だが、こと音訳に関しては別である。なぜなら、音訳は話し言葉ではなく、書き言葉を音声表現したものだからだ。書き言葉は話し言葉よりずっと遅れて変化するものであるから、音訳はやはりオーソドックスな共通語アクセントによるのが望ましいと私は考えている。

おわりに

以前、知人からこんな話を聞いた。東京のある区立図書館では定期的に音訳講習会が開かれるが、それは人気が高く、希望してもなかなか受講できないという。すると適性試験かなにかで受講者を選考しているのかと聞くと、そうではなくて“抽選”だと言う。その講習会の修了者の一部は、その図書館で音訳サービスにたずさわることになる。なのに、なぜ適性のある人を選んでとろうという発想にならないのだろうか。その図書館では、音訳サービスの質の向上を図ろうという意識が薄いと判断されても仕方がなさそうだ。その音訳講習会は、区民にお勉強の場を提供することが主目的なのだろうか。実にもったいない話だと思った。

音訳の質の向上のためには、様々な角度からの取り組みが必要である。まず、何が良い音訳なのかということの研究、音訳者の指導法と指導体制の確立、そして利用者がだれでもどこでもいつでも良質の音訳サービスを受けられる仕組づくりなどなど。どれをとっても、道は険しく遠いように見える。だが、我々は現状に甘んじることなく、一歩ずつでも前進していく以外にないのである。

※　この原稿は公共図書館ではたらく視覚障害者で組織されている「なごや会」主催で行われました「音訳図書の質を考えるシンポジウム」で発表された内容を掲載させて頂きました。

第９回　録音図書製作グループ音訳研究会のご案内

今回は、デイジー図書はどんな聞き方ができて、どんな作り方ができるのかを福井哲也氏を招いて研究します。

デイジー図書製作をこれから始めようと思っておられるグループや現在製作中のグループも大いに参加してください。

尚、会場の都合で参加者は１グループ２人までとさせて頂きます。

日　時：２００２年９月５日（木）
　　１３時３０分～１５時３０分
会　場：盲人情報文化センター　９階ホール
　　地下鉄　肥後橋駅　２番出口すぐ
テーマ：１、「使いたい、作りたい、こだわりのデイジー」
　　講師　福井哲也　氏（日本ライトハウス点字情報技術センター）
　　２、グループの情報交換　15:00～15:30
　　３、　次回の日程とテーマ
〆切日：２００２年８月３１日まで

※　参加希望者は盲人情報文化センターまで、グループ名、参加者名、電話番号を記入の上、ファックスでお申し込み下さい。
（FAX　０６－６４４１－００３９）

２００２年度、録音図書製作講習会のご案内

盲人情報文化センターでは、録音図書製作講習会（全２５回）を下記の内容で行います。この講習会では発声、アクセント、腹式呼吸など基礎的な訓練を終了している方を対象に録音図書を製作するのに必要な技術（録音技術、漢字や記号・図表などの処理方法、調査技術、録音の順序など）２年間かけて勉強します。

この「講習」を終了した方は、家庭録音や盲人情報文化センターのスタジオで録音していただくことを基本としています。

この講習会の受講者は、まず、下記日程で行われます盲人情報文化センター主催の「ボランティア基礎講座」（全２回）を受講していただきます。基礎講座終了後、９月２７日（金）の選考試験を受けていただきます。

尚、試験日当日、来館出来ない方は、担当者までお申し出ください。

＊担当　盲人情報文化センター　録音製作係

講習会実施要項

ボランティア基礎講座（全２回）盲人情報文化センター９階ホール

第１回　９月５日(木)、９月13日(金)　いずれかに参加

第２回　９月19日(木)、９月20日(金)　〃

※いずれも午後１時半～４時

時　期　２００２年１０月４日（金）～２００３年５月16日（金）

までは第１金と第３金（月２回）

２００３年６月～2004年３月まで第３金曜（月１回）

※時間　１０：００～１２：００

講習内容　１．録音技術　２．調査技術　３．校正技術

４．漢字、図、表などの音声変換処理技術

５．録音図書製作基準

定　員　１０名

申込方法　申込用紙に記入の上、郵送(Faxも可)またはご持参ください。

社会福祉法人日本ライトハウス

盲人情報文化センター録音製作係

〒５５０－０００２　大阪市西区江戸堀1-13-2

電話　０６－６４４１－００１５

Fax　０６－６４４１－００３９

〆切日　２００２年９月４日（水）

試験日　２００２年９月27日（金）

盲人情報文化センター　９階　１０時～１２時

試験内容　①アナウンステスト

②漢字テスト、

③音声で伝える為の処理センス

③面接

※筆記用具持参のこと　鉛筆、消しゴム

講習開始　２００２年１０月４日（金）

１０：００～１２：００

専門音訳講習会

東洋医学コース（基礎編）のご案内

この講習会は前期と後期それぞれ５回で実施されますが、前期は定員３０人（定員オーバーの場合は抽選）、後期は前期終了者のなかから選考試験を受けて合格者が講習をうけていただきます。

この講習会の案内は近畿視情協加盟館にも配布されています。地元の館推薦で参加を希望されます方は地元の図書館にご相談ください。

講習会名	専門音訳講習会・東洋医学コース（基礎編）
内　　容	東洋医学関係の図書を音訳するための講習会を前期５回、後期５回に分けて行います。 前期の講習では基礎的な知識を学んでいただき、後期の講習では、前期受講者の中から選考試験に合格した方を対象に、実際に東洋医学関係の音訳をしながら勉強していただきます。
日　　程	前期　２００２年１０月４日(金)～１１月２９日(金) 隔週金曜日・午後３時～５時（全５回） 後期　２００３年１月１７日(金)～３月７日(金) 隔週金曜日・午後３時～５時（全５回）
講　　師	前期　片山　一夫氏（国立神戸視障センター教官） 後期　東洋医学チーム　森　和子氏他
定　　員	前期　３０名（申し込み多数の場合抽選） 後期　１０名（選考試験あり）
資　　格	現在、実際に音訳活動をしているボランティアで、東洋医学に興味のある方
申込方法	申込用紙を提出 後期講習は１２月６日(金)１３時から適性テストを行います。
申込締切	２００２年９月２１日（土）

受　講　料　　1,000円（全５回分）

※　尚、この件についてのお問い合わせは
盲人情報文化センター録音製作係まで
電話　０６－６４４１－００１５

デイジー編集をはじめる（その１０）

７．マルチデイジー図書編集ソフト LpStudio Plus

Sigtuna DAR2.0 はデイジー編集の基本ソフトであり、音声と見出しとで構成されるデイジー図書を作成するのに広く用いられている。また、音声に同期してテキスト（文字）や画像（図や写真）を表示できるマルチデイジー図書編集ソフト LpStudio Plus も株式会社エルザから市販されており、これを用いて製作されたマルチデイジー図書も一部市販されるようになった。しかし、上記いずれの場合も、専用の再生装置（PLEXTALK など）では音声だけを聞くことになる。

筆者の所属するグループでは、リハ協より LpStudio Plus の供与および講習を受ける機会を得、マルチデイジー図書を作成した。表題の「デイジー編集をはじめる」段階でこれを用いる機会は少ないと思われるが、将来への参考として紹介する。

７．１　Lp Player による再生画面

デイジー図書再生ソフト Lp Player をインストールすることで、デイジー図書をパソコンで鑑賞することができる。LpStudio Plus で編集したマルチデイジー図書の LpPlayer 再生画面を図７．１に示す。

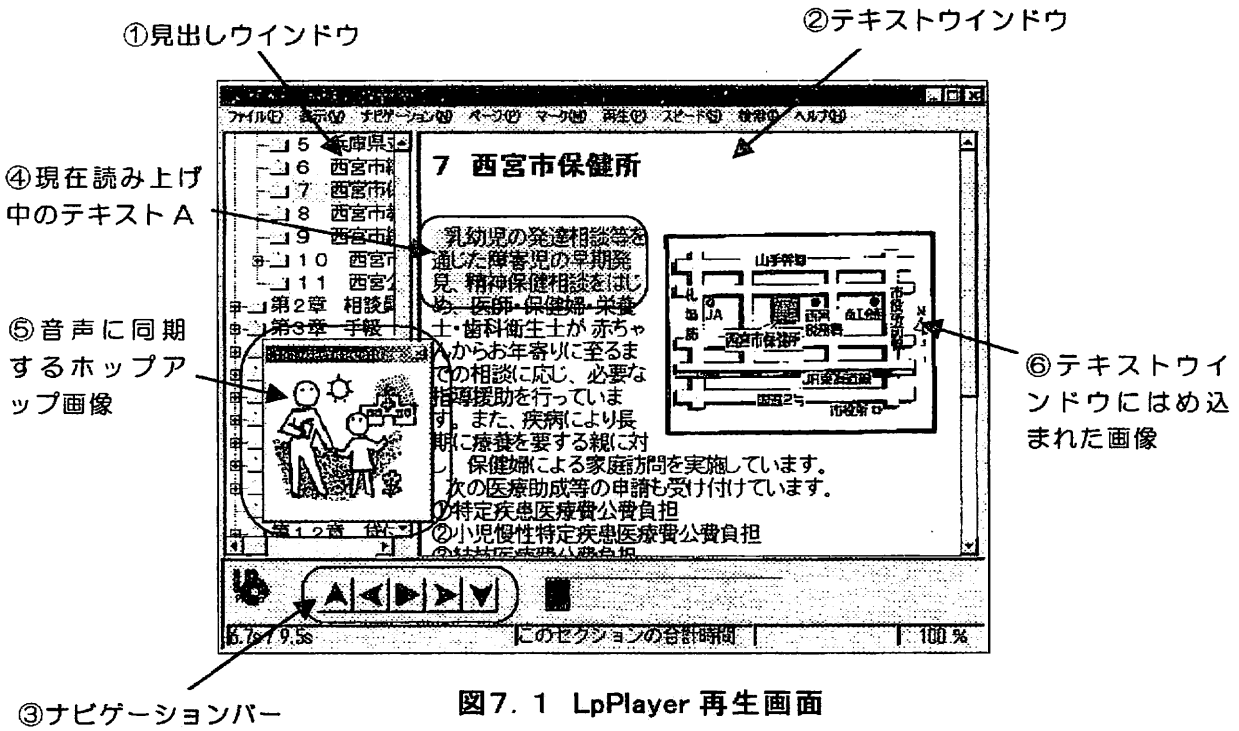

図7．1　LpPlayer 再生画面

LpPlayer による再生画面では左側に①見出し（ナビゲーションコントロールセンタ NCC）と右側に②テキストウインドウが表示される。画面下には再生、停止、フレーズ送り他の５つのボタンで構成される③ナビゲーションバーがある。音声に同期して、④現在読み上げ中のテキスト（フレーズ）A が黄色にハイライトされると同時に、このテキスト A に関連した画像⑤がホップアップ表示される（例ではイラストであるが写真等であってもよい）。また、テキストの所定の位置に画像⑥（図や写真）（例では関連する施設所在地の地図）を本の挿絵のようにはめ込んでおくこともできる。

7．2　LpStudio Plus 編集画面

LpStudio Plus にはメイン画面、編集画面、ATAU 画面、QAPlayer 画面の４つのモジュールがある。メイン画面では音声のインポート、ビルドブックなどの操作を行う。編集画面では音声データの各種編集（音声イベント（フレーズ）またはセクションの分割、結合、削除など）のほか音声イベントに同期させる画像を挿入することができる。

ATAU 画面（音声テキスト追加ユーティリティ Audio Text Addition Utility）では録音された音声イベント（フレーズ）に同期させてテキストを入力することができる。QAPlayer は LpPlayer と同様の機能を持ち、図書のレイアウト等プロジェクトの仕上がり具合を確認するのに用いる。

ここでは図７．２に編集画面（図７．１の例に対応）の構成を示す。

画面は①メニューバー、②ツールバーのほか左側の③ナビゲーションコントロールセンター（NCC、セクションリストに相当）には見出し（NCC アイテム）が階層構造で表示される。右側にはナビゲーションコントロールセンターで選択された見出し（例：７西宮市保健所）に含まれる音声イベント（フレーズ）やテキストイベントおよび画像イベントがグリッド表示される④イベントリストがある。イベントリストの下にはシンクロされた図書が表示される⑤ブラウザウインドウがある。

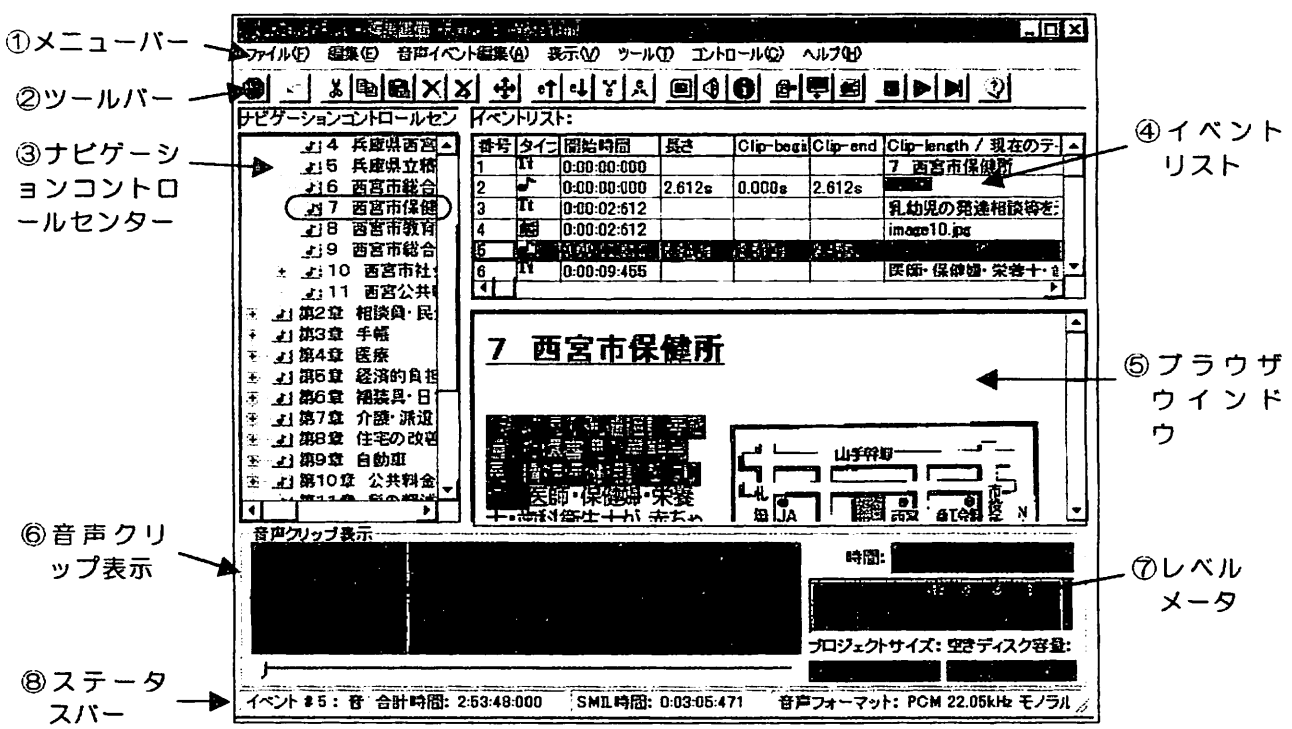

図7．2　LpStudio Plus の編集画面

その下には編集ソフト Sigtuna DAR2.0 におけるフレーズ分割画面に相当する⑥音声クリップ表示があって音声イベントが波形表示され、その右側には⑦レベルメータがあり、音声と波形を対照させながら音声の編集を行うことができる。最下段にはイベント情報や合計時間などが表示される⑧ステータスバーがある。

（つづく）

（テープライブラリーにしのみや　鳥生次郎）